

# ヒロシマの被爆者・佐伯敏子さんとの再会と新たなつながり

## 一九五〇年代の靖国神社遺児参拝の実像（6）

松岡 勲

はじめに

今年（二〇一四年）三月にひさしぶりに広島を訪れることになりました。なぜ広島に行くことになったのかといいますと、三年前から参加している戦争社会学研究会の研究大会が広島で行われることになったからです。広島には二年前までは修学旅行の取り組みのために頻繁に訪れていましたが、小学校から中学校に転勤ということになり、これまでお世話になった被爆者の方々とお別れの挨拶に広島に訪れたのがその最後でした。その頃にお会いした被爆者の方々の多くが亡くなりましたが、ぜひ再会したい方がいました。その方が被爆者の佐伯敏子さんでした。それで佐伯さんを探し始めました。

## 二八年ぶりの佐伯敏子さんとの再会

佐伯敏子さんには一九八一年にはじめての広島の修学旅行（高槻市立富田小学校）で子どもたちに被爆体験を語っていただきました。その後、高槻地方自治センターで広島修学旅行を学校現場で広げるための取り組みを進めていた時に大変お世話になりました。

た。佐伯さんは一三人の肉親を原爆で亡くされ、その死を見つめてこられました。また原爆供養塔の清掃などのお世話をされ、供養塔の墓守といわれた方でした。佐伯さんは「私は三百六十五日の死者との共同生活です。」「ヒロシマには歳はないのです。あの日のまま。」「『自治研究』第一四号、高槻地方自治センター、一九八六年」と語られました。佐伯さんの魅力は、原爆で亡くなった方々を目の前に浮かぶように、いまそこに生きているかのように語られることでした。

佐伯さんは私が父の戦死と向き合うことに大きな影響を与え、次のように私の母へのまなざしを変えてくださいました。

高槻市立富田小学校の「原爆から平和への願い 広島修学旅行文集」（一九八一年度卒業生）の「はじめに」で、「私ごとになりませんが、佐伯さんたちと、修学旅行前に二度、お会いすることができ、その後、私の母から、戦死した父のことで三六年たつて、はじめに聞いた話がありました。母に対するまなざしに変化が、私のなかにもおこったから聞いたのだと思います。」と私は書いています。その母から聞いた話は次のような内容でした。

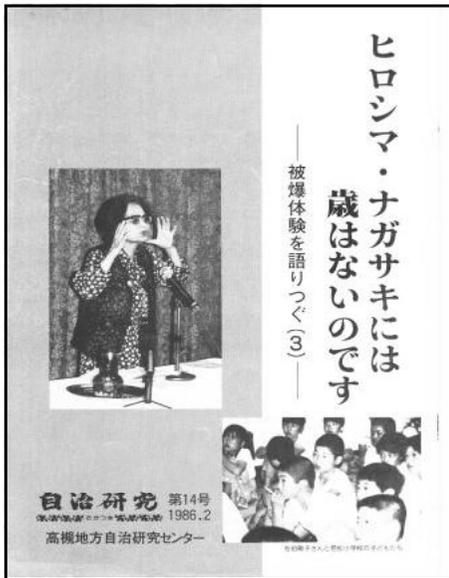
——お盆前だった。家に飾ってある「父の写真」をもっと真ん中に移したいと母にいわれ、普段なら邪魔くさくなるところだが、被爆者との出会いを経過していたので、「死者」との距離が近く

なっていたのだろう、「うん、いいよ」とすぐに引き受けた。私が写真の額を拭いていたとき、母がこんなことを話し出した。「終戦の一年後やったかな、地域の合同慰霊祭があって、午前中、親戚が集まり、『お父さんが帰って来る』と聞かされたお前は走りまわって、はしゃいでいた。けれども午後にお寺に行き、白木の箱がならんでいるだけと知って、お前は『お父さん、どこにもいいひん・』とかなしそうやった」と。私にはその記憶がないのだが、その時の私と母の姿を思い描き、幼い私を見ていた母の視線を感じとり、母をいとおしく思った。（靖国神社祀取消訴訟での私の「陳述書」）

さて、佐伯さんを探したのですが、「個人情報保護」の制約で、思いのほか難行しました。いろいろ手立てを講じたなかで、最終的に広島にお住まいの児童文学者の中澤晶子さんの御助力により、新聞記者情報で佐伯さんは広島市内の老人健康施設「ウエルフェア」におられると分かりました。二年前までは御健在を確認できるが、現在はどうか分からないとのこと、老健施設の住所・電話番号を知らせていただきました。ドキドキしながら老健施設に電話をしました。女性の職員の方に事情をお話しをしましたところ、「云えますよ。」との返事で大変喜びました。それで佐伯さんに都合を聞いていただき、三月八日の午後にお会いする約束になりました。

当日、研究会には遅れることにして、広島駅からタクシーで老健施設に向かいました。着いて、二階のロビーで佐伯さんと二八年ぶりに再開し、一時間ほどお話しすることができました。九四歳の佐伯さんは車椅子に乗っておられました。職員の方の話では、目がほとんど見えないうことでした。一九九八年暮れに脳梗塞

で倒れられ、その後何度か入退院を繰り返され、語り部としての活動はできなくなりました。御主人はその頃にお亡くなりになり、「まもなく三十三回忌です。」とおっしゃっていました。息子さん三人おられ、お孫さん、ひ孫さんに恵まれて、三男御夫婦が広島市内に在住し、奥さんとその娘さんがよくお見舞いに来られるとのことでした。お話のなかで印象的だったのは、以前よく関わりにあつた新聞記者や放送記者が今はデスクになっていて、「佐伯さんところに行つて、被爆体験を聞いて、勉強してきなさい。」と新任記者を超越されるそうです。佐伯さんは「しつかりお話しできたか心許ないのですが、記者さんに体験をお話するのは、お話しできたとおっしゃっていました。ときどきのこのような訪れが、佐伯さんの「生」を支えているのではないかと思いました。お別れするとき、佐伯さんと握手しました。その手は細くなつておられましたが、「松岡さんの手は柔らかくて、暖かいね。」といつていた



高槻で語った佐伯敏子さん

## 佐伯さんの体験を朗読する「伝の会」の寺西郁雄さんと出会う

佐伯さんの所在をインターネットで調べているときに、佐伯さんの体験を朗読劇として演じ続けている「伝の会」の寺西郁雄さん（大阪府寝屋川市在住、元門真市職員）のことを知りました。寺西さんを探しましたが、こちらの方もなかなか難しく、佐伯さんにもおたずねしましたが、連絡先は分かりませんでした。門真市会議員の戸田ひさよしさんのお世話で、帰阪後に寺西さんと連絡ができました。寺西さんから資料、上演台本を送っていただき、六月二一日午後にお会いすることができました。寺西さんは私の五歳上で七五歳でした。

寺西さんは広島山の山村（安村）の疎開先で原爆の体験をされています。原爆投下は、六歳の時で安村は爆心地から九キロほどのところで、熱風と黒い雨が強く記憶に残っているとのこと。一九四七年に大阪に戻り、成人して門真市職員として勤め、演劇活動を続けてこられました。広島Ⅱ原爆について関心を持ち続けていましたが、常に広島から弾き返されるという感じであった、距離があつたと話されます。そんな時に、寺西さんは佐伯さんと四人姉妹のことを報じた「二人人が死んだ」という記事（一九七一年八月二日、朝日新聞夕刊）に出会いました。

それで、寺西さんは広島に向かわれます。一九七二年秋、広島市役所を訪れ、原爆対策課の係長に会って、原爆の話を持ち出すとすぐ「その話ならこの人が一番です。一緒に行きましょう。」と先に立って歩きだしました。行き先は平和記念公園でした。さ

らに公園に入るとどんどん進み、供養塔の安置所の入り口の前まで来ると、「佐伯さん」と孫長が呼びかけ、「この人は広島原爆のことを調べたくて市役所をたずねて来られたが、佐伯さんにお聞きするのがいいと思ってお連れしました。」といって、すぐ帰っていかれました。その女性は赤い表紙の被爆体験記「一三人の死を見つめて」をくださいました。その場できつそく読みはじめました。馴染みのある地名、村名がでてきます。反射的に「二人人が死んだ」という新聞記事を取り出し、彼女に見せました。「この佐伯さんは、あなたのことですか？」とたずねました。うなずいた佐伯さんとの交流がその瞬間から始まったのでした。

佐伯さんとの出会いの感動が伝わってくる話でした。その後寺西さんは毎年広島に通われ、佐伯さんの被爆体験の聞き取り、被爆者の眠る供養塔前で佐伯さんが行われてきた「まだ死者たちがきていた八月五日の伽の一夜」（御通夜）に一九九八年まで参加していかれました。一九九八年に佐伯さんが病に倒れられ、一九九九年は五三年間続けてきた御通夜が中止とな



原爆供養塔の入り口



ります。それで、寺西さんは「私の目で見、耳で聞き、心で受け止めた佐伯さんの半生を朗読劇にして伝えたい。」と佐伯さんに申し出ます。佐伯さんは、「広島を語るとは事実を語るしかないのです。」「私は動きが取れん身、お願いします。」といわれました。その後、二〇〇〇年から現在まで一四回、毎年八月五日に供養塔前で佐伯さんの半生を語る朗読劇「広島に歳はないんよ 佐伯敏子さんの半生」を寺西さんの台本・演出で「伝の会」のみなさんが続けてきました。佐伯さんが語る「ヒロシマの心を受け止めてください。」という思いが寺西さんの足を広島に向かわせたのだと思います。今年もこの供養塔前の朗読会に出かけようと思っています。もうひとつ印象深い寺西さんの話がありました。寺西さんは納骨所のなかには朝鮮人の遺骨があることを佐伯さんから教えられました。佐伯さんの「原爆供養塔には、八月六日のあの日とそのまんまあるんよ。」という言葉で「私自身の問題」として受け止めるべく、朝鮮人被害者の問題にも取り組んでおられるとのことでした。

## おわりに

佐伯さんとお会いできたことがきっかけで、『ヒロシマ・ノール』（インパクト出版会）の著者の東琢磨さんと知り合いました。東さんと知り合ったのは、フェイスブック上で佐伯さんについてやりとりがあったからでした。佐伯さんと那須正幹・西村繁男著『絵で読む 広島原爆』（福音館書店）との関係性が深いことを教えられ、その後、読みました。西村繁男さんの当時の被爆状況を再現した精密な絵は「宝石」のように感じました。この本は多くの被害者の証言のもとに作られています。佐伯さんの証言が参照されていることが分かります。それには「描いた人を『絵人間』と呼んだ人は『ヒロシマは歳をとらない、あの日のまんなま』と言っています。」とあります。（西村繁男「復元図絵解き」）今回は佐伯敏子さんと再会することを通じて、また新たな人とのつながりが広がりました。

## （お願い）

次からは「京都市における小学校六年時における靖国神社遺児参拝」について調べていくつもりですが、この件に関して、靖国訴訟地裁結審時に「靖国文集」の話をしたことがあり、傍聴者の方から、「小学校の時、その参拝に友だちが行くのでうらやましく感じたことがあった。父がシベリア抑留からの帰還者であった・・・」等とお聞かせいただいたのですが、お名前、連絡先をお聞きしないままでした。一度、連絡いただけませんかでしょうか。